

ソ連に連行されず

民間人で復員

岩手県 阿部 圓次郎

大正十二年二月二十八日、岩手県紫波郡旧長岡村大字西長岡五〇に生まれ（現住所・紫波町日詰字東裏九七―六）、昭和十八年徴集で、六〇七月頃日詰小学校で八十人ぐらいで検査を受け、私は甲種合格の第一号でした。

家族は兄、兄嫁でした。家業は農業でしたが私は自動車会社の助手として昭和十四年から勤め、昭和十六年七月に自動車の免許を取っていたから当時としては特殊技能者でした。

昭和十九年一月十九日、入営のため集合を命ぜられたのは大阪市の余り大きくない旅館でした。そこで軍服を支給されたのですが、他部隊の者を含めて百人ぐらいかと記憶します。引率者は将校二〇三名、ほかに

下士官が来ていました。

四〇五日宿舎にいて、それから引率されて門司から船で釜山、列車で奉天、新京経由、興安北省アルシャンの満州第三三九部隊に入隊、独立工兵部隊でした。

しかし、私は自動車の運転手なので、訓練も少なく検閲も受けない。私が入隊した時、隊にはトラック四台で、運転手は三名しかいないので、トラックをフルに動かすため、私は兵隊の訓練は受けず、運転手専門でした。

古参兵や他の人たちは討伐や何かに時々出たが、私は工兵ですから架橋、漕舟とか土工とか、一〇二か月は訓練を受けたが他の訓練は受けない。銃も背のうも支給されません。内務班では掃除ぐらい、古兵とは食事の時話ぐらいでした。

私は運転技術者なので、日常「教練や検閲を受けないくてよい、官舎へ行って満人を使って、これこれの仕事をせよ」と指示を受けていたのです。将校の官舎で糧秣などの倉庫から石炭とか満人を使って運搬などをするのです。

昭和二十年六月頃、連隊を編成するため各地から工兵大隊が集まった。大きい兵舎で、連隊長は押川大佐で、集結地はハルピンでした。七月末頃、部隊はフラギルに移動、その後、本隊がゴザコに移動したのですが、私は運転手なのでトラック二台と作業のための兵隊二十名と共にフラギルに残り、器材を本隊に送り出していました。ですから私は軍隊に来たのか運転に来たのか判らない。新連隊は五個中隊ぐらいいったと思います。

八月中頃、状況がおかしいので、我々はチチハルへ行ったところ、兵舎は空で誰もいない。移動したのか何処へ行ったのか判らなかったので、残置された二十名は、そこで待機していた。八月二十五日頃だったか終戦を知った。その時、将校が一人残っていて、正式にどういふ連絡があったか不明だがチチハルへ戻りました。

その後、将校の指示で日本へ帰るので奉天へ行くことになり、途中の北安駅まで一般邦人も一緒だったが、駅付近で兵器やトラックを焼却した。だからソ連軍に

よる武装解除もなかったわけです。

そこでもう軍人でないような姿になって一般邦人と同じようになった。もう指揮も何も無い、軍隊というより難民となり北安駅で宿泊したが毛布も何も無い。

夜中に突如拳銃の発砲があった。目を醒ますと「立て、両手を挙げる」と、ソ連兵が言った。難民だから一般人、女子供もいた。一般邦人で働き盛りの人もいた。軍人で服装を変えている者もいる。手を挙げたらソ連兵によって万年筆や時計など取り上げられ、その後北安駅から連行され約二十分位歩かされ、北安飛行場へ連れていかれた。

そこで二か月半の間、ソ連軍の使役をさせられたが、食事は高粱のお粥でした。その二か月半の間、ソ連では「関東軍の兵隊が足りない」何処かへ逃げたのだからか、とに角シベリアへ連れていく兵隊の員数合わせなのでしょう。昭和二十年十一月初旬頃まで三回ぐらい検索にきました。

しかし、私は背が低いので「軍人ではない、軍隊とは関係ない」というふうに見られソ連には連行されな

かった。甲種合格だったが背が低いということで、結果的に運が良かったわけです。

ソ連軍は、此処にはこの位兵隊が居る筈だということで、働けそうな体の良い者が連れられた。兵隊でも民間人でも区別無しです。従って病人などは関係無く除かれました。我々部隊の兵隊も四く五人は連れていかれ、この人狩りからのがれた者は十二く三人位はいました。

昭和二十年十一月末頃、南新京へ行ったが、着のみ着のままです。随分寒い。だから着る物を捜し、軍服に作業服などをバラバラにして、それを縫い付け、厚くして軍服だということが判らぬよう、また寒さをしのげるようにして生活していました。

私はそのうちに、新潟県の開拓団の仲間に入れてもらい、十二月初め満州人の農家に作男として入りました。仕事は寒い時ですが、日本の農家で一般的にいう「秋仕舞」をすることでした。例えば寒くなるから重い物を囲んだり、燃料にしたり家畜の餌にするため高粱の殻を集めたり始末する仕事はあるのです。物を整

理することで、日本では一般的に秋仕舞というのです。

働いていた農家は近隣に三軒ぐらい家があるグループの自家のような家で、祖父母、父母、子供など七人ぐらいいる所謂専業農家でした。家の者は私が軍靴を履いていたので日本の兵隊だと判っていたが、満人にとって私は労働力だからソ連軍に密告する必要はない。満人との関係は虐待されるようなことは無かったが、他では虐待された人もあった、と後で聞きました。

その農家は新京から一里ぐらいの所でしたが、昭和二十一年七月頃までは遠くへ行くことは無く、農家の周辺の島などで仕事をしていました。附近では、共産軍と国民政府軍か雑軍のようなものの射ち合いの鉄砲の音が何時も聞こえていたので、外出は危険だと思つて、黙々と働きながら、前途のことや、家のことを考えながら帰国出来ることを毎日願っていたのです。

私は満語は話せない。農家の者はいくらか日本語が話せるので手真似や身振りや日常の意志ぐらいは何とか通じ合っていました。しかし、日本の状況など全然判らないのです。不安といえは不安の連続の八く九か

月でしたが、今では考えられぬ生活、労働の日々でした。話す相手の日本人とも遇わないのですから、労働の苦勞より精神的な苦しみの方が多かったです。私も農家で生まれ甲種合格の軍人ですから肉体的には耐えることは出来ました。

とに角、丈夫で日本に帰らねばと念じながらの日々でした。戦後は日本人と満州人は主客転倒となっていました。

待望の帰国が出来そうな情報は何んとなく聞こえてきました。それは、私が新潟県開拓団グループに入っていたからでしょう。その点何日何処でとの記憶は無いが、風のたよりとでも申すか、風聞とでもいうのか、そんなものが身に感じて来たのかも知れません。

昭和二十一年の七月、「満人の所へ行っているものは帰って来い」と、開拓団の指揮者から伝えて来ました。私の所へも歩いて廻って来て教えてくれたのです。それで、南新京に戻ったら、日本人が集結しているのです。その中には在留邦人、女性や子供もいました。軍人もいました。列車に乗って一日半ぐらいで港へ着

いた。列車は発車したり停ったりで、私たちは不安の中、早く港へ着かないかと話しながら祈りながらの長い一日半でした。

今度はやっと乗船したが海が荒れ、波浪が高く、三日ぐらいかかり、やっと博多に着いたのは八月十六日でした。港で一人一人調べ、一般邦人と軍人に分けられたのです。私のように軍人でも民間人の服を来ている者もあり、軍服を着ている一般民間人の者もいる。服装では区別がつかないのです。

私の復員手続きはこのようにして行われたのですが、博多では伝染病が出て留め置かれることになったのです。やっと苦勞を重ね、故国の土を踏んだのに、この数日間は本当に長く感じました。しかし、ここは日本なのだとの安堵感があったが、家族はどうしているかな、など心配もあり、一刻も早く顔を見たい、見せたいとの気持ちは、まさに帰心矢の如しというものでした。

ようやく、解除され、列車に乗って盛岡駅へ着いたのは昭和二十一年八月二十三日でした。私の家は盛岡

からも花巻駅からも約五里（二十キロ）です。家では父母も健在、兄弟男三人、女一人で、軍隊に関係あったのは私一人でしたので、皆で無事を喜び合うことが出来ました。

思えば満州へ出発してからもう五十年になろうとしています。半世紀も前のことですので記憶も定かでないが、私の奇しき思い出であります。

東安病馬廠隊員

農奴となり、奇跡の生還

岩手県 角野 喜三郎

支那事変の始まる前の昭和十二年春の兵隊検査で甲種合格。ところが籤のがれ、定員オーバーということで現役入営はしませんでした。昭和十年徴集兵です。私は大正五年三月六日に当時の岩手県九戸郡大川目村（現在の久慈市大川目町）で生れたのです。

戦争の中期、昭和十八年五月五日召集で、弘前の北

部第十六部隊に入り、一週間後満州東安省宝清の騎兵第三旅団第二四連隊に入隊しました。当時もう騎兵隊の大部分は搜索連隊になり機械化されていたのですが、第二四連隊は本場の乗馬隊で馬が二百頭ぐらいいたと記憶しています（第二三連隊は騎砲隊）。

最後の騎兵旅団で初年兵教育を受けたのです。一期三か月は歩兵の訓練、二期からは乗馬を主体とした訓練です。私は農家で家に馬がいたので馬には馴れていたが、軍隊の教育はそんな生やさしいものではなかったのです。

二期の教育が終わったら蹄鉄工の教育が六か月ぐらい。教育はさらに厳しい、工務兵の下士官から目玉を喰う。蹄鉄を馬の蹄に合わせるのだが型がうまくいかない。鉄を焼いては打ち、打っては焼く、そのうちに釘の穴も無くなり苦労した。六か月でようやく一人前になった。演習の時は、落鉄等があるので工務兵として馬に乗ってついていく。

昭和十九年七月、国境の饒河へ一個中隊二百名ぐらい移駐した。兵隊一人に馬一頭の割の編成です。ハバ